

2026.9
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

9号

第48巻
No.446



メハジキ *Leonurus japonicus* Houtt. (シソ科 *Lamiaceae*)

生薬 ヤクモソウ（益母草） 8－9月ころ、開花前に地上部を採取し、陽乾する。

成分 アルカロイド：leonurine、leonurinine、leonuridine、stachydrine、フラボン配糖体：rutin、脂肪酸：lauric acid、linoleic acid、linolenic acid、fumaric acidなど

効能 民間薬として月経不順や産前産後の止血、めまい、腹痛など婦人の代表的な薬。芍婦調血飲などの漢方処方にも配合される。

生薬 ヤクモソウ（益母草）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



第15改正日本薬局方（2007）にヤクモソウ（益母草）が新しく収載され、メハジキ又は*Leonurus sibiricus*（ホソバメハジキ）の花期の地上部であると定められました。

メハジキは北海道、本州、四国、九州、琉球、朝鮮半島、台湾、中国大陸、ロシア沿海地方、東南アジア、南アジアなど広い範囲に分布し、山野、野原、堤防、道ばた、荒地などに自生する越年草です。根生葉には長い葉柄があり、卵円形で浅い切れ込み、葉縁に粗い鈍鋸歯があり、越冬し花が咲く時期には枯れます。2年目に直立した茎は、四角形で短い圧毛が多く生え、高さは50－150cmになり、まばらに分枝します。この茎は弾力があり、昔は子どもたちが短く切った茎の切れ端を、脇につ

っかえ棒にして張って、目を大きく開かせて遊んだことから和名がつけられました。茎生葉は対生し、下部につく葉は長い葉柄があり、葉身は深く3裂から全裂し、裂片はさらに羽状に切れ込んで幅3mmほどの線状披針形となります。茎の上部の葉は葉柄も短くなり、葉身もしだいに小さくなり披針形で側裂片は短くなり、最上部の茎葉は卵形から倒披針形で分裂しません。花は夏から秋にかけて茎の上部の葉腋に段状に数個かたまって咲き、その姿がライオンの尾に似ていることからギリシア語のleon（ライオン）+oura（尾）から属学名*Leonurus*がつけられました。花冠は唇形で色は淡紅色を呈します。薬用以外に古くから染料としても利用されています。万葉集に「わが屋前に 生ふる土針 心ゆも 想はぬ人の 衣に摺らゆな 作者未詳」とある「土針」は染料としてのメハジキのことで、心から思いもしない人の衣を染めてはならないと戒めている歌です。

もう一種のホソバメハジキは河北、山西省、陝西省、モンゴル、南シベリア（種学名*sibiricus*）原産で、花茎の葉は著しく3深裂し、裂片は線形になり、葉の小葉裂片は幅1－3mmと細い。花冠は大きく、下唇は上唇の3／4の長さで、花冠の外面の長い柔毛は、かなり密です。

忘れてならない類似植物にヨウシュメハジキ（*L. cardiaca*）があります。マザーワート（母の草）の名で女性疾患の薬として知られ、また心臓疾患の薬としても使っていました。種小名の*cardiaca*はラテン語の「心臓の」の意味です。主にヨーロッパの南東部から中央アジアに分布する多年草で、草丈100－150cm、茎葉の下部のものは長い葉柄を持ち、長卵形で先が2－3裂し、縁に鋭い鋸歯があり、モミジの葉に似ていることからモミジバキセウタの別名で呼ばれることもあります。上部にいくにしたがって小さくなり、無柄になります。花冠は大きく淡紅紫色で、上唇は凸状で白い毛で覆われています。古代ギリシア時代からマザーワートの名の通り婦人病やヒステリーの治療に用いられました。

日本国内に自生することから、古書にその名を見ることができます。『大同類聚方』（808）巻二四痰吐き病に「女波自紀」の和名が、『新撰字鏡』（898－901）は「菫蔚女波自支又益母と云う」、『本草和名』（918）には「菫蔚子 和名女波之岐」と平安時代初期からメハジキの名でよばれていました。江戸時代の『本草綱目啓蒙』（1803）には「菫蔚 メハジキ、益母草」の項に「自生のもの原野に多くあり。秋中子落ちて自ら苗を生ず。初は地に就て叢生す。葉形円にして岐多く、草母草（*Aconitum japonicum*）の葉に似て薄軟にして毛茸あり。春以後は臺を抽て漸く高く、五、六尺に至る。茎四稜にして大麻茎の如し。葉対生す。茎上の葉は漸く長く梢の葉は艾（*Artemisia princeps*）葉の如くなり。脚葉の形、円なるに異なり、夏秋の間ごとに節に多く並びて花を開く。大さ三、四分、淡紫色にして微紅色を帯ぶ」と形態について詳しく述べられています。（村上守一 記）